

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00017

研究課題名（和文）現象学への寄与をめざした、ブレンターノ学派の時間・空間・感性論の研究

研究課題名（英文）Research on aesthetics, theory of time and space in Brentano School, aimed at contribution to the phenomenology

研究代表者

村田 憲郎（Murata, Norio）

東海大学・文学部・教授

研究者番号：80514976

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、オーストリアの哲学者フランツ・ブレンターノにはじまる、ブレンターノ学派の時間・空間・感性的表象についての理論を、系統的に理解することにより、現象学への寄与を目指すものである。ただしこの学派を現象学から遡ってその単なる前段階として解釈するのではなく、近年の海外の研究も踏まえ、学派の各動向の固有性を尊重しつつそれらの発展をそれ自体として捉えた。このアプローチにより、これまで日本であまり考慮されたことのないブレンターノ学派の、時間・空間論における多面性が浮かび上がり、その学術的資源としての価値が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ブレンターノは数学におけるトポロジーを摂取しつつ、空間・時間を色や音や強度などの担い手となる連続体として位置づけた。シュトゥンプフもまた、質から分離不可能だが概念上は区別できる表象内容として空間を捉え、全体と部分の理論を構想している。マイノングは、エーレンフェルスの言うゲシュタルト質を基づけられた内容と読み替え、関係を与える主体の作用に注目し、そこからグラーツ学派の理論が展開したが、ベルリンのゲシュタルト学派は、グラーツ学派が恒常性仮説を前提していると批判した。これらはすべて、現象学はもとより、現代のクオリア理論や美学などからも参照可能な、検討に値する理論的オプションを提供するはずである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to contribute to phenomenology through a systematic understanding of the theories of time, space, and sensory representation of the Brentano school, which began with the Austrian philosopher Franz Brentano. The research policy here is however not to interpret this school as a mere prelude to phenomenology but to respect the specificity of each movement of the school, based on recent overseas research. This approach has brought to light the multifaceted character of the Brentano school in terms of the theory of space and time, which has not been considered much in Japan until now, and has demonstrated its significance as a theoretical resource.

研究分野：哲学

キーワード：現象学 時間 空間 ブレンターノ 感覚 フッサール メルロ＝ポンティ ゲシュタルト心理学

## 1. 研究開始当初の背景

フッサールの時間意識の現象学は近年、脳科学・認知科学・心理学などの隣接分野から注目を集めているが、学説史的にはそれに先立つブレンターノ学派の諸議論から根本的に理解する必要がある。また他方では近年、単なる現象学の前段階ではないこの学派の固有の価値が再評価されつつある。こうしてブレンターノ学派の議論をそれ自体として再構成するアプローチにおいて、時間論、さらには関連する空間論や感性的表象内容の諸理論を理解する必要性が感じられた。

## 2. 研究の目的

こうした背景から、第一に、ブレンターノ学派の時間論、空間論、感性論を系統的に研究し、学派内の諸分派の相違も考慮に入れながら、体系的に理解することが目標とされた。またこうした理解を通じて第二に、フッサールの時間論やメルロ＝ポンティの空間論など、広く現象学全般に寄与することが目指された。

## 3. 研究の方法

広範なブレンターノ学派の議論を適切な解像度で扱うために、研究課題を以下の四つに分割した。1) ブレンターノの記述心理学における感性的表象についての議論の解明、2) シュトゥンプフの空間表象論の把握、3) マイノングおよび(エーレンフェルスを含めた)グラーツ学派の複合的対象の理論の系統的理解、4) これらの議論とゲシュタルト心理学との関係の検証。それぞれの課題について主要なテキストを選出し、他の研究との兼ね合いも考えながら、半年を一区切りとして各課題に取り組んだ。

## 4. 研究成果

まず 1)のブレンターノ自身の表象の理論については、2020年に公刊された新資料である、ブレンターノの1884/5年講義「基礎論理学とそこに必要な刷新」の聴講者によるノートにもとづき、当時のブレンターノの表象の理論について理解を深めた。この講義はフッサール自身も聴講しており、最初期フッサール思想の成立を考える上でも非常に重要であるが、本研究ではフッサールから遡ってその原型を読み込むのではなく、むしろ当時のコンテクスト、とりわけ数学史との関係で講義内容を理解することを目指した。その結果、ブレンターノの表象内容の理論は、連続体とその境界についての議論として提示されているが、そこで彼が当時の数学者カントールの連続体論との対決を意識しながら、独自の議論を展開していることが明らかになった。この研究成果は学会発表および論文「ブレンターノ1884/5年講義——「基礎論理学とそこに必要な刷新」について——」として発表された。

次に 2)のシュトゥンプフの空間表象論については、彼の名著『空間表象の心理学的起源』(1874年)の内容を精読し、議論の概要を掴んだ。この議論はフッサールの『論理学研究』における全体と部分の理論の下敷きにもなっており、ブレンターノ学派の特色をよく表していると思われる。この著作でシュトゥンプフは、空間表象について、感覚質の単なる複合物(ヘルバルト)でもなく、特殊な感覚質(ペイン)でもなく、感覚に由来しない形式(カント、ヴェーバー、ロツェ)でもない、感覚質と絡み合った内容的要素だとし、このような表象内容の理論として全体と部分の理論を構想したが、これがフッサールによって発展的に継承されることになった。この点については未発表であるが、今後、発表の機会を探したい。

さらに 3)のマイノング周辺の議論については、初期マイノングの変遷を、「ヒューム研究II」「複合体と関係の心理学のために(エーレンフェルス評)」「心的分析の理論について」「高階の対象およびその内的知覚への関係について」などの諸論文を順次検討することであとづけ、この発展の過程におけるエーレンフェルスのインパクトについて検討した。その結果、エーレンフェルスのマイノングに対する影響はそれほど決定的ではなく、マイノングは独自に関係の理論から複合体の理論を発展させていったことが明らかになった。この研究成果は研究ノート「マイノング哲学の発展とエーレンフェルス」にまとめた。

またマイノングを主導者とするグラーツ学派については、この学派の主要な論者であるベヌッシの理論の展開に即して調査した。この点は次の 4)の課題中で提示する。

最後に 4)のゲシュタルト心理学との関係については、主にメルロ＝ポンティの『行動の構造』や『知覚の現象学』を参照しながら、そこに現れてくるゲシュタルト心理学の重要な論点を辿った。まず、人間の自由について、『行動の構造』における自由の象徴的形態を裏づける、ケーラーのチンパンジーの実験について確認した。ケーラーによれば、囲いに入れられたチンパンジーは囲いを迂回して脱出できるが、餌を同様の囲いに入れて棒を渡しても、囲いを迂回させて手繰り寄せることはできなかった。この点からメルロ＝ポンティは、人間的自由の一つの特質は一人

称視点と三人称視点とを交換できることだとしたが、この事情についてケーラーの実験の詳細を調べ、理解を深めた。この成果は日本心理学会の公募シンポジウム「ナラティブ・セルフをどう研究するか」において提題者として発表した。また第二に、ベルリンのゲシュタルト学派と、グラーツ学派との対決という相貌を呈したベヌッシ - コフカ論争について、近年の研究にもとづいて調査し、論争史として再構成した。それによれば、コフカのベヌッシ批判はいくつかの点で不当であるが、ゲシュタルトの弁別的な特徴だとベヌッシがみなした多義性については、むしろ知覚にとって一般的な特性だと考えるべきだという洞察を得た。この点はある論文集にて近く公開される予定である。

こうして四つの課題について、それぞれ新たな成果を挙げることができ、空間・時間・感性についての学的資源としてのプレントナーノ学派の意義を示すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 20
2. 論文標題 布伦ターノ1884/5年講義 - - 「基礎論理学とそこに必要な刷新」について - -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 フッサル研究	6. 最初と最後の頁 18-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 113
2. 論文標題 マイノング哲学の発展とエーレンフェルス - - 「円い四角」をめぐる - -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文学部	6. 最初と最後の頁 11-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田憲郎	4. 巻 112
2. 論文標題 『フェミニスト現象学における時間』を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文学部	6. 最初と最後の頁 61-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 布伦ターノとフッサールの関係について 誤解されがちないくつかの点
3. 学会等名 東京唯物論研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 体験の絶対性について 『イデーンI』 第二篇第二章から
3. 学会等名 東北大学哲学倫理学合同研究室研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中彰吾, 嶋田総太郎, 村田憲郎, 宮崎美智子
2. 発表標題 ナラティブ・セルフをどう研究するか
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村田憲郎
2. 発表標題 ブレンターノ1884/5年講義「基礎論理学とそこに必要な刷新」について
3. 学会等名 フッサール研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 荒畑 靖宏、吉川 孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 あらわれを哲学する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap  
<https://researchmap.jp/noriorimuratajp>  
リサーチマップ  
<https://researchmap.jp/noriorimuratajp>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------